法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

奄美の歌謡と民俗の中の”キョラ”

恵原, 義盛 / エバラ, ヨシモリ / EBARA, Yoshimoro

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
5
(開始ページ / Start Page)
55
(終了ページ / End Page)
107
(発行年 / Year)
1978-06-30
(URL)
https://doi.org/10.15002/00015536

奄美の歌謡と民俗の中の〝キョラ〟

恵原義盛

はしがき

国語では〝うつくしい〟〝きれい〟〝うるわしい〟〝りっぱ〟〝みごと〟などと、美感を現わすことばが幾つもあるに対し、奄美にあっては〝キョラ〟の一語しかない。それは、清らかさを以って美の根源とする奄美の人（或いは南島の人としてもよいかも知れない）の基層思念に発する結果のもので、国語では幾つにも使い分けされる「美しさ」のことばが、奄美では〝キョラ〟に集約されるものと考えられるのである。

このことについて私は、昭和四十八年に出版した拙著『奄美生活誌』の「まえがき」で私の考えているところのものを概略述べたことがある。そして奄美の人の暮し方が〝キョラサ〟を理想とし、そ

の生活は貧しくともきよらかであったことを拙文の行間から読みとって貰いたいことを希った次第であった。それを若干補充する意味で、奄美の昔の人が〝キョラ〟という語をどのように使ったか、ということと、生活習俗の中で〝清め〟がどのように行われたか、ということを、歌と習俗の中の〝キョラ〟と、キョラの具象化とみられる白の習俗を提示してみたいと思う。これによって、昔の奄美の（或いは南島の）人の〝きょら〟の心を汲みとる上に何等かの参考になるものがあれば筆者のこの上ない喜びである。

一　歌謡の中の〝キョラ〟

奄美方言の〝キョラ〟は沖縄の〝チュラ〟に該当するが、この〝キョラ〟が日常用語、会話などでどのように使われているかを叙述すると範囲が相当に拡大されるのである。ここでは対象を限定して、昔からそれほど変っていないとみられる歌謡の中で〝キョラ〟ということばが歌詞のなかでどのように使われているか、そしてその意味するところのものは何かを探求することにしたい。

(一)　〝キョラ〟が詠まれる定形歌詞

注　ここにいう定形歌詞とは、いわゆる琉歌調の歌詞をいう。それは三十音を以って形成されるのが普通であるが、三十二音のものもあり、或いは寧ろ三十二音の方が古い形ではないかと思われる節がある。傍印。は〔i〕、・は〔ë〕の中

舌母音。

1　太陽

①
かさにうとぅたてて。　笠に音立てて
ふたるなちぐれも　降った夏雨も
なまやうちはれて。　今は打晴れて
てだぬきょらさ　太陽の美しさ

この〃きょら〃は美しさでもあり、清らかさでもある。

②
あがるてだだもそ　上の太陽でさえ
くもぬしたなりゅり　雲の下になりをる
いきゃきょらさあて。も　如何に美しいとて
したどぅなりゅる　下にぞなる

この〃きょら〃は美人の意である。女性を太陽に譬えての歌。

2　月

③
かんきょらさてりゅる　斯くも清らかに照る
じゅうごやぬおつき　十五夜のお月(でも)
かながじょにたてば　加那が門に立てば

くもてたぼれ　　曇って下さい

この〝きょら〟も清らしさと美しさの二様に解される。第一節と第二節と入れ替るものもある。

④

つきぬてりぎょらさ　　月の照り美しさは
とぅかみきゃじゅうごや　　十三日と十五夜で
みわらべぬきょらさ　　乙女の美しさは
とぅあまりなぬち　　十を七つ余るとき

第一節の〝きょら〟は清らかな、完うなの意が強く、第三節の〝きょら〟は美しさ、清楚さの意が強い。

3　花

⑤

みやまわかざくら　　深山の若桜の
ゆだむちぬきょらさ　　枝ぶりの美しさよ
ももしのでしので　　百忍び忍んで
ちゅゆだとぅらな　　一枝取りたいもの

深窓の娘を桜に譬えたもの。この〝きょら〟はみごとと訳すべきか。

⑥

はななればつぼみ　　花なら蕾だ
ゆだむちやいらぬ　　枝ぶりは要らない
わかさてどぅきょらさ　　若いからこそ美しい

よわさてどぅうまさ　　餓じさこそおいしい

この〃きょら〃はうるわしいと訳すが適切のようである。

⑦

うやふたりなかに　　親二人の仲に

つほどぅたるはなぬ　　蕾んでいた花が

きうぬよかろひに　　今日の佳き日に

さきゅるきょらさ　　咲く美しさ

この歌は婚礼祝いの歌で花嫁を花に譬えたもの。この〃きょら〃は〃みごと〃がぴったりする。

⑧

ながれこぬみずに　　流れる川の水に

さくらばなうけて　　桜の花を浮かせて

いろぎょらさあてどぅ　　色の美しさにぞ

しくてみしゃる　　掬ってみたのだ

この〃ぎょらさ〃は清らかさと訳す方がぴったりする。この歌は吉屋つるの作となっているが、奄美では昔からのものと信じられていて疑問が残る。

⑨

みやまおくやまに　　深山奥山に

つほどぅたるはなぬ　　蕾んでいた花が

きうぬよかるひに　　今日の佳き日に

さちゃるきょらさ　　咲いた美しさ

⑤と同じく深窓の娘を花に譬えたものであるが、⑦と同じく婚礼祝歌である。

⑩ あんはなぬきょらさ　　あの花の美しさ

こぅんはなぬきょらさ　　この花の美しさ

たげにまんきぎょらさ　　互いに舞い美しく

そろてきょらさ　　揃って美しい

舞い踊りをする娘達を花に譬えたもの。上の句の〃きょら〃は両方共〃うるわし〃と訳すべく、下の句の〃きょら〃は両方共〃みごと〃と訳すべきであろう。

⑪ いじゅぬきぬはなや　　イジュの木の花は

あんきょらささきゅり　　あんなに美しく咲く

わぬもいじゅなとぅて。　　私もイジュになって

ましるさかな　　真白く咲きたい

イジュの木は南島の木で和名は定かでない。この〃きょら〃は美しいとも清らかにとも訳してよく、奄美のキョラにぴったりである。

4　草木

⑫ ぐわんじつぬしかま　　元日の朝

とぅくむかてみれば　　床に向ってみたら
うらじるとゆじる　　裏白と譲葉が
ゆわいぎょらさ　　斎われて美しい

この歌は正月祝歌の一である。末節のゆわいは飾るとか供えとかに訳してよく、〝きょらさ〟は完成美であり〝みごと〟とも〝美しい〟とも訳してよいであろう。

⑬
こぅばぬはどぅありょる　　蒲葵の葉なればこそ
むちなしぬきょらさ　　均整の美しいことよ
あちさしだましゅる　　暑さを涼しませる
たまぬうちふぁ　　玉の団扇だ

「むちなし」は在り方。姿という意。この〝きょら〟は整い揃う美しさをいう。

⑭
みあげればきょらさ　　見上げたら美しい
わかまつぬこゆだ　　若松の小枝
またもみあげれば　　またも見上げたら
わたまこがね　　吾が愛する者(だった)

「たまこがね」は玉黄金と書き、恋人や愛児の代名詞。

⑮
こぅばぬたちぎょらさ　　蒲葵の立ち美しさは

まよろいけんうぃぬこぅば　真与呂池上の蒲葵
まつぬたちぎょらさ　松の立ち美しさは
まおせてらんうぃぬまつ　真於斉寺上の松

この〃きょら〃は共に〃みごと〃と訳すべきであろう。「まよろ」は与呂の美称、「まおせ」は於斉の美称。

⑯

とばやがじまるぬ　トバヤ榕樹の
ゆだむちぬきょらさ　枝ぶりの美しさよ
すばぬじろぐじぬ　側の次郎宮司の
めまよぎょらさ　目眉の美しさよ

「とばやがじまる」は喜界島小野津にあるうらとみ伝説にまつわる老大木榕樹のこと、上の句の〃きょらさ〃は〃みごと〃、下の句の〃きょらさ〃は〃きれい〃がふさわしい。

⑰

わやんめぬこぅしゅぎ　吾家前の胡椒木は
ゆだむちぬきょらさ　枝ぶりが美しい
なりふりやいらぬ　服装身なりは要らぬ
ことやこころ　事は心掛である

⑱

しのやごろまごろ　篠竹真竹は
たちならでぎょらさ　立ち並んで美しい

ぎりたちゅるまぎり　　義理の立つ地方は
そろてきょらさ　　揃って美しい

「まぎり」は琉球治下時代からの行政区域名、上の句の〝きょら〟は〝みごとさ〟、下の句の〝きょらさ〟は〝りっぱ〟とも〝うつくしい〟とも訳すべきであろう。

⑲
うむぬはぬちよや　　芋の葉の露は
まだまよりぎょらさ　　真玉より美しい
まだまあたらまし　　真玉惜しいこと
ぬちゃいはちゃい　　貫いて佩かう

この〝きょらさ〟は清らかさとも美しいとも訳されるし、〝みごと〟とも〝うるわしい〟と訳してもよく、奄美の〝キョラ〟そのものである。

5　鳥獣

⑳
いけうけてきょらさ　　池に浮けて美しいのは
うしぬとぅりめとぅり　　鴛鴦鳥の雌鳥で
にわたてきょらさ　　庭に立てて美しいのは
こがねをぅなり　　愛する妹だ

鴛鴦の雌鳥を美しいとするところにこの〝きょら〟の妙がある。なお、第三節の「にわたてて」を「まいた

てて」とするものもある。

㉑
はらたてて。きょらさ　　野原に立てて美しいのは
あやはだらうしくゎ　　綾斑の牛っこで
にわたてて。きょらさ　　庭に立てて美しいのは
はなぬめらべ　　花盛りの乙女だ

㉒
とりぬうたいきょらさ　　鳥の鳴き美しさは
あをばとぬめとり　　青鳩の雌鳥だ
うたぬうたいきょらさ　　歌の謡い美しさは
なきゃやあらめ　　貴達ではないか

奄美では小鳥や鶏が鳴くことをうたうという。

㉓
ましるはまうれて　　真白の浜に降りて
じかきするとりや　　地掻きする鳥は
くちやくるぐると　　嘴は黒々として
じかきぎょらさ　　地掻きが美しい

この〝きょらさ〟は巧みという意である。

6　村

㉔
たかひらにぬぶて　　高い坂に登って
うれてこぅばみしま　　降りて来たらミシマ
かにきょらさみしま　　斯くも美しいミシマ
はつにをぅがも　　初めて拝さむ

「みしま」は新集落の意か御郷土の意か解し難い。

㉕
うしくかほじまや　　宇宿の果報郷土は
よそじまとかわて。　　他郷土とは変って
いじたちゅるまぎり　　意地の立つ地方で
あらさきょらさ　　荒々しく美しい

「あらさ」は荒々しい意味と、大きく逞ましい意味がある。従ってこの〃きょら〃の意味も色々に解される。なお「うしく」を自分の郷土の集落名に変えてうたうことが多い。

㉖
たしまきょらいんがぬ　　他郷の美男子が
いきゃきょらさあて。　　如何に美しくても
わしまそんごきらぬ　　吾が郷の醜男の
ちゅいきまさり　　一息がましだ

7　家

㉗

あらやしきこので。　　新屋敷を設営して
こがねびゃらうえて　　黄金の柱を植えて
ももとがやうるち　　千束の茅を降して
ふちゃるきょらさ　　葺いた美しさよ

「このので」は希望、企画、欲しがる等の意の語、「こがねびゃら」は最高に固い木の柱、「ももと」は十の百で千のこと。この〝きょら〟は〝みごと〟。新築祝歌。

㉘

やまぬやまかしぎ　　山の山毎に
きしじひゃらいらで　　木の素性よい柱を選び
でくぬさしがねぬ　　大工の曲尺での
ちくりぎょらさ　　造り美しさ

これも新築祝歌。「かしぎ」は「…毎に」「きしじ」は木の素性。曲っていない真直ぐな木のこと。

㉙

しかくゆしばしら　　四角の柞の木の柱に
うえやあやてんじょ　　上は綾天井で
したやいちょだたみ　　下は絹の畳を
しちゃるきょらさ　　敷いた美しさ

これも新築祝歌。家褒め。

㉚ やまぬやまかじに　山という山から
ぜむくとりゆして　材木を取り寄せて
でくせくにんぬ　大工や細工人の
ちくりぎょらさ　造り美し

これも新築家褒めの歌。

㉛ はらぬはらかしぎ　野原野原から
うかやとりゆして　御茅を取寄せて
きうぬよかろひに　今日の住き日に
ふちゃるきょらさ　葺いた美しさ

これは葺上祝の歌。

8　人

㉜ きょらうまれをぅなぐ　美しく生れた女は
しまぬためなりゅめ。　島の為になるまい
やまといちょぎりゃぬ　大和の絹着者の
ためどぅなりゅる　為こそなる

「やまと」は薩摩をさす。

㉝

ゐんがきょらばなや　　男の美しいのは
ななはなにさきゅり　　七花に咲きをる
をぅなぐいやしばなや　　女の醜いのは
ちゅはなさきゅり　　一花だけ咲く

男女が交わることを花咲かすという。七花に咲くとは七人の女と交わるとのこと。七は多数の意に用う。

㉞

やまときょらをとじょや　　大和の美しい乙女は
たるがなしゃるくゎか　　誰が生んだ子か
めはなうちそろて。　　目鼻打揃って
うまれぎょらさ　　生れ美しい

この「やまと」は本土の意か、「をとじょ」は人名か。

㉟

やまときょらをとじょや　　大和の美しい乙女は
いきゃしゃるうまれやしが　　どんな生れしたか
いじるなぬかじに　　出る名の毎に
くちぬさげよ　　沙汰されて

大和の美しい乙女は平家伝説の人。

㊱

うらがみなべかなや　　浦上の鍋加那は

つばきばなきょらさ　椿の花の美しさ
ふですみぬはじめ　筆墨の初まりも
うらかみなべかな　浦上鍋加那だ

浦上のナベカナは平有盛の妻と伝わる。

㊲ とぐちみしぐりに　戸口のお社に
たちゅるあやなごや　立ち居る綾女子は
めはなうちそろて　目鼻打揃って
うまれぎょらさ　生れ美しい

「みしぐり」は御神宮。「あやなご」は女に対しての美称。戸口は平行盛公の居城で、これも平家伝説の歌である。

㊳ やまぬぶてきょらさ　山に登って美しいのは
つばきばなきょらさ　椿の花の美しさ
さとうれてきょらさ　里に降りて美しいのは
とよこてんごしゅ　豊幸筆子主だ

「とよこ」は人名、「てんご」は役名、「しゅ」は敬詞。

㊴ しょどんみわらべぬ　諸鈍の女童の

つらみれば。きょらさ　顔を見ると美しい
ののうらちみれば　布を織らせみると
ゆがたひがた　歪みいびつだ

「のの」は織物をいう。

⑩
あっからきゅんあせくゎ　向うから来る姉っこ
かまちゆいぎょらさ　髪結いの美しさ
わやっけにかたて。　吾が兄に話して
とぅじにもらを　妻に貰おう

「かまち」は頭であるが髪のこと。

⑪
あてつぬとみぐゎや　阿鉄のトミ子は
きょらむんやあて。も　美人ではあっても
さんとぅきさがれば　申刻過ぎれば
めやみりゃん　目は見えない

「きょらむん」は清ら者で美人の意。「さんとき」は申の刻で午後四時。

⑫
やまときょらうとじょや　大和の美乙女は
いきゃしゃるひぬうまれ　どんな日の生れかや

きうぬよかるひに　今日の佳き日に
うまれまれたろ　生れたのだろう

㊸
しょどんみわらべぬ　諸鈍の女童が
いきゃきょらさあて。も　如何に美しくても
わしまぬめらんきゃぬ　吾が郷の女童達の
ういやきらぬ　上には出るまい

㊹
うぃんとのちばかなや　上殿地のバーカナは
しるみずごころ　白水川の水のように
さるくちゅぬかじに　通る人の毎に
しのまれるきょらさ　慕われる美しさ

「ばーかな」は人名、美人の誉れ高い、芦屋部の人。

㊺
きょらさうまれ。ば　美しく生れると
とのにしのまれて　殿に慕われて
きもちゃげぬうらとみや　可愛想な浦富は
しゅなみうたち　潮浪に打たれて

うらとみ物語りの歌。

9　舟

㊻
ふねはらちきょらさ　舟走らせ美しいのは
うしくにゃとがねく　宇宿港金久で
ふねうけてきょらさ　舟浮けて美しいのは
はきなつしろどまり　赤木名津代泊りだ

「にゃと」は「みゃと」ともいう。

㊼
やまとぶねみれば　大和船を見ると
ともまきぬきょらさ　艫巻きが美しく
うしまぶねみれば　大島船を見ると
にちみぎょらさ　荷積みが美しい

この〝きょら〟は共に〝みごと〟と訳すのが適当であろう。

㊽
あじそいがみふね　按司襲いの御船が
となかぬりだせば　渡中に乗り出すと
なみやおしそいそい　浪は押し添い添い
はりゅるきょらさ　走る美しさよ

「あじそい」は島の支配者。

㊾
ふねぬたかともに　船の高艫に
きょらむんばぬして　美人をば乗せて
おもいねせんきゃに　思ってる二才達に
かじばとらち　楫を取らして

㊿
うまはらちきょらさ　馬走らせ美しいのは
しゅみちこみゃがねく　塩道小宮金久で
ふねうけてきょらさ　舟浮けて美しいのは
せだまうやどまり　瀬玉親泊だ

この〝きょら〟も〝みごと〟と訳すがふさわしい。

51
ふねはらちきょらさ　舟走らせ美しいのは
にしぬうみなだら　西の海の凪ぎ時
うまはらちきょらさ　馬走らせ美しいのは
かさんとばる　笠利の平坦原だ

52
ふねはらちきょらさ　舟走らせ美しいのは
ききゃおのつみさき　喜界小野津岬で
うまはらちきょらさ　馬走らせ美しいのは

しゅみちぬながはま　塩道の長浜だ

10　踊り、舞い

㊸
てふれふれてふれ　手振れ振れ手振れ
てふればどぅきょらさ　手振ればぞ美しい
てふりふりぎょらさ　手振りの振り美しさ
わたまこぅがね　吾が愛する人

第二節の〃きょらさ〃は〃美しい〃であるか第三節の〃きょらさ〃は巧み、鮮やかの意である。

㊹
ちくてんぐぁぬふしや　チクテン節の歌は
なげればどぅきょらさ　投げればぞ美しい
やまとすでふりゃぬ　大和袖振り者の
わぬやしらぬ　私は知らない

「ちくてん」は踊りや歌の節名、「なげれば」はあまりこだわらずに投げ捨てるようにとの意。下の句は難解。

㊺
ちくてんぐぁぬふしや　チクテン節の踊りは
ふりゃげればどぅきょらさ　振上げてぞ美しい
しまぬめらべんきゃぬ　島の乙女達の

てまいぎょらさ　手舞いは美しい

⑯
いちぶさいまさしゅぬ　伊津部済政主の
てまいぬきょらさよ　手舞いの美しさよ
うれよりもきょらさ　それよりも美しさは
こぅみがねくぬすとぅち　古見金久の蘇鉄だ
「さいまさ」は与人役、郷士格、名瀬の人、政姓。

⑰
あせはだもきょらさ　汗肌も美しい
をぅどぅらばもきょらさ　踊りしても美しい
あれなしゃるうやや　彼を生んだ親は
かみどぅあたろ　神であっただろう
第一節の〝きょら〟と第二節の〝きょら〟は内容が異るものである。

11　その他

⑱
えぃんとぅたまこぅがね。　縁と玉黄金は
ぬけばよそさらめ　離れたら他人だろう
うちふらいふらい　打触れ合い触れ合い
ぬけばきょらく　別れるなら美しく

「ぬき」は「退き」「離れ」「別れ」等の意。この〃きょら〃は「潔く」「きれいに」「名残りなく」等の意である。

⑲

かながきもぎょらさ　　加那の心の美しさ
ぬきかわすさらぬ　　貫き交すサラヌ
めけばちかぢかと　　貫けば近々と
つきあてたぼれ　　交合い下さい

第二節は解し難い。ために全体も不解。

⑳

きうぬよかろひに　　今日の佳き日に
みこべとりなをち　　御髪取り直して
めをとこがねぎふぉ　　女夫黄金簪を
さしゃるきょらさ　　挿した美しさ

成人祝の歌、「みこべ」は髷のこと。「めをと」は夫婦の意。

(二)　〃キョラ〃が誦まれる不定形歌詞

注　ここにいう不定形歌詞とは、現在も三味線唄遊びや八月踊りにうたわれているけれども三十音乃至三十二音でないものをいう。但し江戸時代に薩摩から持込まれたとみられる二十六字形は除く。

①

そてつぬきょらさや　　蘇鉄の美しさは
こみがねくぬそてつ　　古見金久の蘇鉄
うれよりもきょらさや　　それよりも美しいのは
とぐちやひらまつ　　戸口は平松
まうらぬとぅしんめ　　真浦の通し穴

この〃きょらさ〃は共に〃りっぱ〃がふさわしい。

②

めまよぬきょらさや　　目眉の美しさは
たちがみぬ　　立神の
いきゅんぬめまよ　　アジサシの目眉
うれよりもきょらさ　　それより美しいのは
まるたをぅなりぬ　　丸田の妹の
きちじるかなめまよ　　吉鶴加那の目眉

「いきゅん」は夏季に来る海鳥アジサシの類。

③

わんかなあらめ　　吾加那ではないか
むこからだんがささち。　　向うから洋傘さして
きょらげたくできゅんや　　美下駄履き来るのは

わんかなあらめ　　吾加那ではないか
まとういあんま　　待とうね母さん
びんだれにみずくで　　鬢盥に水を汲んで
てのげちぢめて　　手拭い提げて
まといあんま　　待とうね母さん

くるだんど節でうたう歌詞、この〝きょら〟は新らしいの意になる。

④
あんまがうかげ　　お母さんのお蔭
きょらぎんきりゅしも　　美着物着るのも
きょらきびまきゅしも　　美帯を巻くのも
あんまがうかげ　　お母さんのお蔭
じゅうがうかげ　　お父さんのお蔭
そろばんならうも　　算盤習うのも
てならいするしも　　手習いするのも
じゅうがうかげ　　お父さんのお蔭

この〝きょら〟も新調の意である。

⑤
つきぬきょらさ　　月の美しさ

じゅうよっかおつきと　十四日のお月と
じゅうごやおつきと　十五夜のお月と
つきぬきょらさ　月の美しさ
うれよりもきょらさ　それよりも美しい
やまとましぎあごと　大和浜のスギ姉と
せっこぬとみとや　節子のトミとは
うれよりもきょらさ　それよりも美しい

大和浜のシギアゴという女は明治初期の女、節子のトミという女は明治中期の女で共に当時の代表的美人であったという。

⑥

うけくままんじょちば　請島のクメ万女は
あがしがで　あんなにまで
きょらしゃるをぅなぐ　美しさのある女
ゐしればや　坐らせればや
つゆぬたりゅり　露が垂れる（みたいに）し
たてればや　立てればや
みずぬはりゅり　水が走る（みたいに）し

「まんじょ」は遊女のこと。「うけくままんじょぶし」の元歌。

⑦

くんにょりよねあごや　国直のヨネ姉は
くんにょりよねあご　国直のヨネ姉は
きょらむんじゃ　美人だ
くんにょりよねあごや　国直ヨネ姉は
やましたねせんきゃにゃ　山下の二才達には
およばらんど　及ばれないよ

「くんにょりよねあご節」の元歌。

⑧

あんはなぬ　あの花の
まんきぎょらさ　招き美しさ
こぅんはなぬ　この花の
まんきぎょらさ　招き美しさ
まんききょらきょら　招き美々しく
しゅーて　していて
そろてきょらさ　揃って美しい

「まんき」は「招き」とも「舞い」とも訳す。

⑨

いちぶさいまさしゅや　伊津部の済政主は
ぎんぬぎふぁぬ　銀の簪の
にふんさち　二本插し
とじぬあんごしゃれや　妻の姉御は
まだまよりきょらさ　真玉より美しい

「いちぶさいまさしゅ」という八月踊りがあり、その元歌。「あんごしゃれ」は妾のこと。

⑩

てまいぬきょらさや　手舞いの美しいのは
やまとはまぬ　大和浜の
みのやすしゅ　美能安主で
にばんなりゅんちゅや　二番になる人は
いちぶぬまさとぬ　伊津部の真里の
くんたけしゅ　国武主だ

美能安は大和方の与人、太姓、国武は名瀬方の与人、慶（いわい）姓、「まさと」は里の美称。

⑪

じゅうごやぬおつき　十五夜のお月
てりぎょらさぎょらさ　照り美しく美しく
うれよりもきょらさ　それよりも美しい

たちごぬみやまつ　竜郷の宮松の
めまよぬきょらさ　目眉の美しさ

⑫
ゆわいぎょらさや　斎って美しさは
なきゃわきゃうとぅざね　貴達吾達の兄弟
うたいぎょらさぬ　謡い美しくて
わらいぎょらさぬ　笑い美しくて

この〃きょら〃は三つとも色々な意味に解される。

⑬
しょぐぁちぎんにゃ　正月着物には
やれぎんきちも　破れ着物着るとも
いしゃらぬきょらむん　石原の美人を
もらてたぼれ　貰って下さい

㈢　子供ユングトゥの中の〃キョラ〃

①
ドンドルドンドル　ドンドル虫
むかしぬきょらめらべ　昔の美し乙女

「ドンドル」は約二糎長さの節足動物。妹に化け澄まして按司の妻になった姉の化身との民話あり。臭いの

で指で弾き飛ばすときの唱えユングトである。

②

きなぞーちゅーや　知名瀬の人は
むーぞねかーで　藻茎煮食って
わたざくら　腹腐れ
にしぶーちゅーや　根瀬部の人は
しょーむんかーで　素麺食って
わたぎょらさ　腹美し

にしぶーちゅーや　根瀬の人は
かっちょんあぎかーで　鰹の鰓を食って
わたざくら　腹腐れ
きなぞーちゅーや　知名瀬の人は
むちぐめかーで　餅米食って
わたぎょらさ　腹美し

このユングトは知名瀬の子供と根瀬部の子供が喧嘩するときの悪口である。この〝きょら〟は清らかがびったりである。

③

あさごろちんちん　朝頃てんてん
ゆうごろちんちん　夕頃てんてん
さむせんばひきゃせ　三味線を弾かせ
（中略）
えーちゅぬくゎんきゃや　金持の子達は
えーむんじゃむんじゃ　良いものだものだ
いーろい　ろーぬ　色々の
きょらぎんきーち　美着物着て
あしびがいもろ　遊びに行かれる
（後略）

これは手毬歌の一であるが、長いので略した（三一書房発行『日本庶民生活史料集成』第十九巻一九八頁参照）。この〝きょら〟は〝美〟とも〝晴〟とも〝新〟とも解される。

④

いんちゃまごいんちゃまご　三石窟石窟
ぬきぬき　（原意未詳）
てだやうしきゃらすて。　太陽は押掛けさせて
しんびゃらひきゃすて。　隅柱を曳かせて

やまとおもりに　　大和天降りに
にぎゃりさしくで。　　（原意未詳）
はしぬしたなん　　橋の下にて
きょらがみわらべぬ　　美し髪の乙女が
あんもも（こぅんもも　　あの腿この腿
いじゃすて　　出していて
（後略）

これも手毬歌のユングト。（『日本庶民生活史料集成』第十九巻二〇一頁参照）

㈣　口説の中の〝キョラ〟

①

疱瘡口説

くとし　うめどし　　今年うめ年
うめ　おこち　　思い起して
いじゃる　はるどし　　過きたはる年
はる　ぬぼて　　原に登って
わんぬめわらべんきゃが　　湾の乙女等が

にごたん　くと　願ったことは
きょらがさねごゆる　美し瘡を願う
ぐゎんやたてて　祈願を立てて
かほがさねごゆる　果報な瘡を願う
ぐゎんやたてて　祈願を立てて

（中略）

やまとぬかほがさ　大和の果報な瘡は
いきゃやだれんが　如何なものだろう
やまとぬきょらがさ　大和の美し瘡は
いきゃやだれんが　如何なものだろう
やまとぬかほがさ　大和の果報瘡は
かほなむんだれん　果報なものですよ
やまとぬきょらがさ　大和の美し瘡は
きょらかむんだれん　美しいものですよ

（後略）

これは徳之島に伝わる疱瘡口説の部分で、用語も徳之島ことばが使われている。この〝きょらがさ〟の訳

語の選定には迷いがあり、奄美の〝キョラ〟の本質的なものを感ずる。

② くぶなわ口説

（前略）

やまぬきょらさや　山の美しいのは
わしでらよ　和瀬のテラ（山）よ
わかいゅぬまんどるどんや　若魚の多い所は
あきちゅむら　秋津村（亀徳）
むらぐゎぬひるさや　村の広いのは
かめじむら　亀津村
むらぐゎぬきゅらさんま　村の美しいのも
かめじむら　亀津村

（中略）

はまぐゎぬきゅらさや　浜の美しいのは
うもなわよ　面縄よ
うもなわみなとぐゎぬ　面縄港は
きゅらさして　美しくして

きりいすきりはめ　切石切塡め
きゅらあしが　美しいが
くぶなわじゅしちはち　クブナワ十七八
ふなしたて　船仕立て
くぶなわきゅらいんが　クブナワ美男子
ふなしたて　船仕立て
（後略）

㈤　流れ歌の中の〝キョラ〟

①　芭蕉流れ

i うてんとぬしたに　ウテン平の下に
わがうぃたるばしゃや　吾が植えた芭蕉は
あをばだらだらと　青葉垂れ垂れと
めたるきょらさ　萌えた美しさ
ii あをばだらだらと　青葉垂れ垂れと
めたるきょらばしゃや　萌えた美し芭蕉は

かまばとりゆして　鎌をば取寄せて
としゃるきょらさ　倒した美しさ
（以下上三節省略）
ⅲはじゃるきょらさ　剝いだ美しさ
ⅳにしゃるきょらさ　煮た美しさ
ⅴひちゃるきょらさ　ひいた美しさ
ⅵふしゃるきょらさ　干した美しさ
ⅶをだるきょらさ　績んだ美しさ
ⅷちんだるきょらさ　紡んだ美しさ
ⅸすめたるきょらさ　染めた美しさ
ⅹ（省略）

②　くさながね

（前十節省略）
あおきあおあおとよー　青木は青々と
しげしげと　繁々と
みぃーたるきょらさや　生えたる美しさ

あじゃはばなやさらさらと　すすきはさらさらと
くねんぎぬたちぎゅらさ　九年母が立ち美しさ
しじゅくばなやたれ　シジュクバナは垂れ
たれたれと　垂れ垂れと
みぃたるきゅらさーやー　生えたる美しさ
さんきらぬ　さんきいらの
さねまきぎゅらさー　蔓の巻き美しさ
つるまきかずらぬ　蔓巻かずらの
まきぎゅらさー　巻き美しさ
かねくかずらぬ　野葡萄蔓の
からまききゅらさー　から巻き美しさ
あさつゆに　朝露に
ぬりたるきゅらさー　濡れた美しさ
ゆーつゆに　夕露に
ぬりたるきゅらさー　濡れた美しさ
（以下十二節省略）

③「うずらんめ」の歌の中の〝キョラ〟

にしやなても　西になっても
ひがしやなて。も　東になっても
のやきしらって。　野焼きされて
で。とぼとぼ　さあ飛んで行こう
めとりんめ　雌鳥の君（妻）

（中略）

なんやとべば　あなたは飛べば
とぅで。いけ　飛んで行け
わんやなしゃるくぁと　わたしは生した子と
ちゅみちなりゅん　運命を共にする
ななさくこえて　七谷（迫）越えて
ななうすじこえて　七頂上越えて
にどむどぅてみれば　二度戻って見れば
うやくぁじれじれ　母子共共
やけもやけぎょらさ　焼けも焼け美しく

すしもすしぎょらさ　　伸びも伸び美しく

（後略）

この〝きょら〟を適切に表わす国語は見当らない。

(六)　おもりの中の〝キョラ〟

①

おれおもり　　今日の時直れ

けぶぬときなをれ　　今のキガヲレ（未詳）

なまぬゐがをれ　　太陽の神が

てだぬかみが　　天上に通して（？）

おぼちとせ　　火の神が（？）

ぢるま　　綾神座通して（？）

あやかくらとせ　　嶽のクセイ（未詳）（後まで？）

たけぬくせい　　鳴響む親神女の

とよむおやのろ　　霊力継筋人（？）

せざぢりきょ　　筋取る御神

ちれんとるみきゃみ

なよくらぬおおかみ　　ナヨクラの大神（未詳）
きょらやおおかみ　　美しや大神
みなやねぬかみ　　ミナヤネの神（未詳）
きぎょのぼて　　清川に登って
さじぎょのぼて　　浄水川に登って
（後略）

(七)　民謡の中の「キョラ」の解釈

以上のほかにも〃キョラ〃が詠まれているオモリ、流れ歌、口説などあるが、その用法は凡そ同類であるから省略する。

以上八十三首の歌の中に〃キョラ〃ということばが百五十九回（但し芭蕉流れ、くぶなわ口説、疱瘡口説の中の省略した部分の中の〃キョラ〃十五回を含む）使われており、下段の訳詞には一応「美し」としておいたが、それらは孰れも幾様にも訳される性質のものである。

訳詞はその人の感受如何に左右されるであろうが、私の感覚では凡そ次のように訳詞が相応するように思う。

清らか＝(一)の1・3・4・11・19・59　(二)の5・11　(三)の2

うるわし＝㈠の6・7・8・9・10・20・21　㈡の5・6・8　㈥の1
りっぱ＝㈠の13・25・40・47・54・55　㈡の12
きれい＝㈠の2・14・16・24・39・53・58　㈡の2　㈢の4
みごと＝㈠の5・12・15・17・18・22・23・27・28・29・30・31・46・48・50・51・52・56・60
㈡の1・10　㈣の1　㈤の1・2・3
美し＝㈠の26・32・33・34・35・36・37・38・41・42・43・44・45・49　㈡の7・9・13　㈢の1
㈣の2
新し＝㈡の3・4　㈢の3

いうまでもなく、これら〝キョラ〟の訳詞にしたことばの内容には共通するものがあり、何れに置替えても差支えないものがあるが、中にはその一方にしか訳しようがないものがある。例えば㈢の2の「わたぎょら」の〝キョラ〟は濁りない、心がさらっとしたことの意であり「清らか」と訳すしかなく、腹の中が「美しい」とか「りっぱ」とかでは適当でないと思われるようなものである。

また㈡の3の「きょらげた」㈡の4の「きょらぎん」、「きょらきび」などの〝キョラ〟は新品の意であり、新らしいものをキョラで表現する例である。これに対しその解訳上問題なのは㈤の3の「やけぎょらさ」と「すしぎょらさ」の〝キョラ〟と㈣の1の「きょらがさ」の〝キョラ〟である。これを一応「みごと」の部に入れたのは「みごと」の内容には完全性の美を懐くと解するからであり、

〝キョラ〟ということばの幅の広さを示すものと思う。

なお(六)の「きょらやおおかみ」の〝キョラ〟は「うるわし」の部に入れたが、これも完璧性や清らかさなど、美の本質的な総てのものを〝キョラ〟に収縮した表現であると思う。

このようにキョラは総ゆる現象の美を表現することばであり、それは些かの欠陥も贅余もない完璧を美しとするものである。それが清らかさにつながるのである。

二　清めの習俗

民俗習慣の中に「清め」がどのように行われてきたか、その主なものを挙げてみる。

(一)　ィニーシクマとクンチの清め

戦前には村一斉の官命による大掃除が毎年夏季に行われた。これを清潔検査といった。大正時代が最も厳しかったようである。巡査が検査に廻って来てやり直しを命ずることもあったので怖れられたが、目が届かないと思われる箇所は抜かれるのであった。これに対し自発的な大掃除が年に二度あった。それはィニーシクマとクンチである。

ィニーシクマはシキョマともシコマともシキュマとも、所によって違うが、稲霊祭である。クンチ

とは大晦日の略称で、旧暦の十二月二十九日の末尾の九日を意味する。（三十日を延び九日という。）この二度の自発的大掃除は官命による渋々乍らのものでなく信仰的なものであるから、見せんがためのものでなく徹底したものであった。クンチは歳神を迎えるために、シキュマはニャーダマガナシ（稲霊神）を迎えるために、家の内外を清めるのである。殊にシキュマの場合は丁度真夏の暑い盛りで水に親しむ時季の故か、家の内外だけでなく家の中の道具一斉まで洗い清めた。ヤホともヒチとも称する長持や、枕、膳箱、簞笥まで海や川に持ち出して洗うので、子供達は長持を舟に仕立てて乗って遊んだりもした。女達は鍋釜薬罐などを川で軽石で磨り光らせてピカピカさすのであった。そして人は勿論のこと牛馬も水浴びして、一斉のものが洗い清められ、田と各家々との間の道も清掃した上で、夕方稲穂三本を刈取ってお供して家に入り、これを床にお供えするのがシキュマの祭りである。日取りは旧暦六月、稲穂が色づきかかるツチノエの日（所によりヒノエの日カノエの日などもある。）で、田植してからこの日までは村内で太鼓を鳴らしてはならないことになっている。

日本の「大祓い」の行事は六月と十二月の晦日の日に行うこと、シキュマは晦日ではないが矢張六月であること、クンチは大晦日であること、そしてその意義が清めであることなど考え合わせると、大祓いの民間行事であるナゴシとシキョマの間の関連性を考えざるを得ないと思う。ただナゴシは稲霊と関係があるか、本土では田植後の物忌みが考えられるようであるが疑問が残るところである。

(二) 年中行事における清め

奄美の年中行事は殆んどがアシビ日である。

アシビ日とは業を休むことである。しかし前記シキュマのように、平素の家業はしないけれどもその行事のための労働が伴う場合がある。シキュマの場合は別であるが、多くのアシビ日は前日に家の内外の掃除をする。これは単に家をきれいに掃除して気持よくするだけの意味でなく、そのアシビ日の意味する祭りに応じての清めである。年中行事にあって特に清めの意義を強く持つものに次のことなどがある。

1　ワカミズ

正月元日の早朝、若水を汲んで来て顔を洗うことは、各個人個人の清めの意味である。それは年が改まって、新らしい年の朝に、聖なる泉の水を以って身を清め、心も清めるためのものである。身を清め心を清めてこそ新らしい年の幸せを掴むことができる、神の守護が得られるとの信仰である。

2　アジナネ

旧暦四月最初の午の日を、ンマーネとしてアシビ日にするが、ンマーネ後のミズノエの日をアジナネ（アズラネともいう）としてアシビ日にする。この日は毒蛇ハブの祭ともいうが極端な物忌みで、村の中を長い物を動かすことが忌まれるだけでなく、村の外からは何物も村内に入れない。うっかり行

商人などでも入って来ようものなら石を投げ、水をぶっかけて追い返すのであった。これ即ち村の清めを外来の穢れに汚させない構えに外ならない。その日取りがミズノエであることからみてもその意義を裏付けするであろう。

3　ハマオレ

アジナネ後の申（さる）の日がハマオレである。ハマオレはムシカラシともいい、稲の害虫や病気を除く祭りである。年男が断食して田からナカゴガレ（心葉が白く枯れている）稲を引抜いてバジ（食わず芋）の葉に包んで海に流し、村人は日の出から日没までの間火を起すことを忌み、浜に降りて食事する。（従って相集って野宴となる。）これ即ち田の清めの祭りである。

4　シバサシ

シバサシは柴插とも柴差とも書く。旧八月最初のヒノエをアラセツというが、シバサシはアラセツ後のミズノエの日が祭り日である。

シバサシは八月三節の一つであるが、この祭りの意義は清めであると考えられる。家敷の四方にシバ（薄）を挿すのでこの名があるが、門口で草を焼くなど他の祭りとは違う行事が伴なう。これ邪悪の祓いに外ならない。

これらのほかにもミチサレ（道淡い）とかキジミチサレとか村の清めの行事があるが省略する。

㈢ 諸事始めの清め

何事を為すにも、その着手に当り心身を清めてから取りかかるのが念者の道とされる。念者とは軽佻浮薄でない人ということ。

心身清めの本式は海に入って潮浴びした上川で水浴びして潮気を落すことであるが、主婦が神祭りする場合のほかは略式で済ませる。それは塩と酒（焼酎）によることが多い。

慎重型（念者）の人であれば毎日の農作業や漁に出かけるに際してもミバレ（心身の清め）してから出発する。現在でも自動車に乗る場合必ずミバレする人が多い。まして左記のような作業に取りかかるに際しては念者ならずともミバレをして出発する習俗であった。従ってこれらの作業を為す家にあっては、縁側か玄関にミバレの準備が為される。それは塩を盛った皿と、焼酎を入れたカラカラ（瓶）と、盃又は茶碗の三つをお盆に載せて出しておくのである。ミバレする人は塩を摘んで少量を頭に載せ、少量を口中に入れ、残りを四方に撒き、更に焼酎を同じことをして残りを飲むのである。

a　茅刈り。材木その他家屋材料採取。

b　クリ舟（シブネ）の材倒しから舟降しまで。

c　製糖場の圧搾器据付、竈築き。

d　水車による甘蔗圧搾作業開始の都度。

e　その他危険作業着手前（現在はダイナマイト操作など）。

㈣　神祭りの齋戒沐浴

村の神祭りはノロ（祝女）がするが、家における神祭りはその家の主婦がする。家における神祭りをする主な行事は次のことどもである。

1　ィニーシクマの稲穂祭り（前出）。

2　八月三節におけるコソガナシ祭り。

3　九月九日のグヮンノーシ（願直し）とグヮンタテ（願立て）。

4　ウジキマチ（お月待祭）＝旧暦正月、五月、九月の三度、その人の干支によって日取りが定まる。

これらの神祭りに際し、主婦は祭壇前に出る前に齋戒沐浴する。厳格な女は必ず海に入り潮がかりして身を清め（これをシュアメという）た上で川に行って水浴びする。海が荒れていて入れない場合は泉や小川で清める。各シマジマ村々にはこのような沐浴する泉や小川がある。これをミゾリゴ、ミドリゴ、キキョゴ、ショージゴ、イジュンゴ、ヤンゴ、シュビンゴなどと呼ぶ。（しかしこの聖なる水が流れはなく飲料にされているものがあり、そこでは浴びない。）

(五) 一生儀礼における清め

1 産湯

牛や山羊や猫でさえ自分の体内から出て来た仔の身体についている粘液を甜めてきれくする習性がある。それは仔の身体をきれくすることによって発育を助けるとの知識によるものでなく本能としてあることを示すものであろう。ところが人間の場合、洗うという知識を得たことによってその本能は信仰につながってゆくことになったようである。洗いは単に不浄物を落せばよいだけでは済まない。不浄物が附着していることは、そこから生ずる衛生的な意味の結果だけでなく、神への不謹慎を意味することになるのである。これを立証する資料として神仕えする人の白衣のことなどもあるが、奄美における産湯の習俗もその一つの資料になるであろう。

奄美では現在は何事も水道の水が一切であるが、戦前までは産湯用の水はショジゴなど前記聖なる泉の水を用いた。しかも名瀬市根瀬部などの例によれば、夏の土用中の水は仮令聖なる水でも効がないとし、妊婦が土用中に出産予定とみられた場合は、土用入前に産湯用の水を数本の瓶に取って保存しておき、分娩したらそれを以って産湯にするのであった。これ即ち産湯で出生児の身体を洗うことは、単なる汚物落しの意味でなく、聖なる生き水を以って身を清めて一人前の人間へ健全な成長への出発の祈りと希いであるわけである。

2　蟹這わせ

奄美では生れた子どもを七日までは日の光を見せないことにし、七日目の日にイザシハジメ（出し初め）という儀式を行うのであるが、このイザシハジメの儀式の一つに「蟹這わせ」がある。それはその日の朝、小蟹を三匹お椀に取って蓋しておき、出し初めで庭先に抱いて出て来た嬰児の頭に椀の中の小蟹を這わせるのである。これが初めて太陽の光に照らされた出生児に対する儀式である。

このことの意義については、「蟹のように健やかに育つようにとの祈り」であるとか、鵜茅葺不合尊の故事に慣うとか、彦奈岐尊の出生の故事とかなどの説もあるが、古老の言によれば蟹は身の周囲を清める習性があるので、出生児の身辺を清める意味であるともいう。

3　水掛婚礼

大島代官記明治六年の項に「此頃大島婚姻ノ時水掛ケノ習慣止ム」とあるが、明治中期までその習俗の名残りがあったことは、現存の古老が未だ覚えている事実である。

水掛けの起源は詳らかでない。昔は新郎新婦双方並んで坐って掛けられたというが、禁止された明治初期の頃には新婦だけが婚家の庭先に坐って掛けられたという。花嫁はサジと称する白い布を被り、タナベと称する白衣を纏い、白馬に乗って嫁入りして来るのであるが、水掛けを受けるときは、花嫁は襦袢がけで、花婿は褌一つの真裸のままで受けたという。（文英吉著『奄美民謡大観』146頁）

水掛けの意義について後世（禁ぜられた明治初）には離婚防止の策の一つと考えられたようであるが

それは後世になるにつれて、嫉妬や憎しみの感情が働いたことがエスカレートしたため肉体的苦痛を与えるようになったからである。婚礼の際新郎新婦に頭から水をかけるということは一見酷い仕打ちのようであるが、これは言い伝わるように「清め」であったとみるべきであろう。即ち今までは人間としては片割れであった男女が一体となり、初めて完全な人間としての新らしい出発をするに当り、身の不浄、心の汚れを洗い清めて、神の守護が得られる資格を持たすための儀式であるというのである。

4　葬送に伴う清め

死者の遺骸を湯水で拭くこと。

来客が去った直後は家を掃かないことになっているが、遺骸が出た直後掃き出しをする習俗。

遺骸が出た直後囲炉裡を清め灰をきれいに整えておく習俗。

埋葬を終えた後浜に降り、汀で潮撥ねすること。

葬送から帰宅する際、玄関又は縁側に予め置いてある塩と粢でミバレをすること。

墓地（又は火葬場）を出るとき塩及び酒（焼酎）でミバレをすること。等々幾重もの清めが葬式には伴うが、この習俗は現在未だ消えていない。詳細は省く。

(六) 建築に伴う清め

家建てには本土でも屋敷とりの修祓や上棟式など〝清め〟を意味する神事儀式が行われるように、奄美にあっては、殊に住居にする家建てには一層厳しく、屋敷とり（ジトリ儀式）や棟上式（ミャゲフキ神事）ばかりでなく、建築途上の諸工程に〝清め〟を意味する儀礼が行われる。例えば材木用の木倒し着手のときのヤマンカミ祭り、材木降しのヤマオロシユワェ（山降の祝）、礎を据えるときのイシジユワェ（礎祝）、柱を建てるときのヌキチケユワェ（貫木付祝）、棟上祝、葺上げたときのイリキャユワェ（葺祝、徳之島ではミャゲバン、与論島ではミシャホ）というような儀礼が幾重にも行われるばかりでなく、毎日の作業着手に当り従事者総てが身を清める塩祓いをする等総てが邪を祓い家を清めるためのものである。その儀礼は多様であるが一例を挙げると、葺上げの儀式にイリキャユワェをするための飯を炊く（ミャゲバン）とき炊き汁を取っておき、葺き終ったとき、主人又は棟領が呪文を唱え、少年達はその真白い炊き汁を口中に含み、呪文を唱え終る都度、四隅の柱の根元に「プー」と吹き掛けるのである。

〈ユーチヌ　シーミヌ
マーミヌ　キーミヌ
アギャマラ　キャーマラ

プー

これを三度繰り返すのである。

このようなことが工程の途上で幾重にも行われることはそこに生活する者の安らぎを希うための清めに外ならない。それらの儀法の説明は省略する。（山下欣一・湧上元雄著『沖縄奄美の民間信仰』P189三、ミャゲウバン、柏常秋著『沖永良部島民俗誌』P16五、ミャゲバン参照）。

三　白の民俗

奄美における白の民俗について論考すれば相当の長文になり限られた紙数では尽されないし本稿の本筋でもないので、ここで白を尊いもの、清らかなものとして取入れられたとみられるものの項目だけを挙げておく。

一、塩＝三宝、建築上の祓、危険作業、送葬

二、シュギ（粢）＝お月祭、マエズク、送葬

三、ミキ（ミシャク）＝願直し（九月九日）

四、餅＝正月、三月、五月、盆、結納、外、

五、白衣＝生着、婚礼、祝女、ユタ、神人衆、死装束、神

六、白幡＝葬送
七、ホゾ（白三角布）＝幼児の襟元、はき玉
八、シメ（標）＝山畑焼畑
九、白水川（シルミヅゴ）の信仰＝水神
十、祭祝白植物＝裏白、浜木綿、苧麻、大根、鉄砲百合、シラカン
十一、米汁＝ミシャゲウバン、　以下省略
十二、白馬、白鳥＝化身、マブリ

白は濁りがない〝キョラ〟色である。清らかなるが故に美しく神聖であり、神高いものとして凡俗人には畏多いものとする。

夜は黒い闇が怖ろしい。東の空が白くなると生きた心持が戻る。白を憧れる所以である。

奄美の昔の人が歌にうたった〝キョラ〟は民俗の白と関連する。白は光の完全な色であり、光を構成する総ての色の結集であることはスペクトルが証明する。完全なもの、それが〝キョラ〟である。皿に盛ったものを少しも残さず食べると「キョラサカダン」（きれいに食べた）というキョラサも、疱瘡口説の中のキョラガサのキョラも余すことなく完全に、との意味であり、それが美しい姿である。即ち〝キョラ〟は完全であり、それは濁りなき、汚れなき、歪みなき、邪なき姿であり美そのものである。汚れ、歪み、濁りは物質的形而下的なものに忌わしいばかりでなく、精神的形而上的なものに

も忌わしいとする。完全なる神は汚れ歪み濁りなどの邪なるものを拒否するものとする。人間は共存共栄の生物として神の子たり得るものであるから利己心は大きな歪みであり、嫉みは汚れである。これらの邪心の無いことがキョラさであり神に願いが出来る資格であるとのことが奄美人の信仰であった。総ての生活は〝キョラ〟くあることが基本であり、理想であるとの姿勢である。

参照＝荒木博之著『日本人の心情論理』（南島の清らかさ）講談社現代新書

宮田登著『原初的思考・白のフォークロア』大和書房

附記

キョラの具象は白で表わし、白は光の具現であり、光の母体は太陽である。その太陽は赤で象徴される。夜の幕が開かれて空は白さを拡げる、人も鳥も獣も草も木も喜び生き還る。この喜びがキョラさである。白が完全になるとき東の水平線に真赤な球が上ってくる。南島人はこれをアケモドロの花と讃え、テダクモガナシと崇める。太陽は拝むもので見るものではないとする。その赤はエネルギーの根元であり情熱であり愛である。白はエネルギーの拡がりであり公平であり清浄であり潔よさであり奉仕である。日章旗はそれを表現する。

（一九七七・九・一三）